

ハルマ和解（江戸ハルマ）		
K070-2		稲村三伯ほか編
ハルマの蘭仏辞典を原本として編集された日本初の蘭和辞典。		

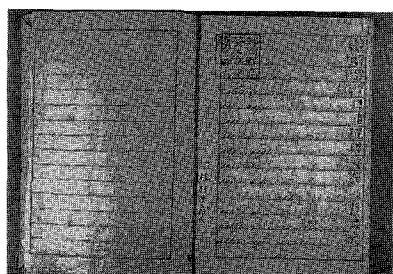
- ◆ 『波留麻和解』（はるまわけ）とも記される。本書は、稲村三伯（1758－1811）が企画し、元通詞の石井恒右衛門を中心として宇田川玄隋、岡田甫説、安田玄真らが協力しながら、13年を費やして完成された。草稿の完成は寛政8年(1796)、以後2～3年を費して30余部が順次刊行された。江戸の蘭学者が中心になったことや、後年に完成された『ゾーフハルマ』（長崎ハルマ）と区別することから、『江戸ハルマ』とも呼ばれる。

原本としたハルマの蘭仏辞典には、オランダ語の見出し語にまずオランダ語の説明があり、さらにフランス語が付けられている。編纂者たちは、このオランダ語の説明の部分を読したのである。刊本は見出し語だけが木活字で印刷され、訳語は毛筆で右から左へ縦書きに記されている。ただし、当館所蔵のものは、写本であるため、オランダ語の見出しも筆で書かれている。収録語数は約6万語である。

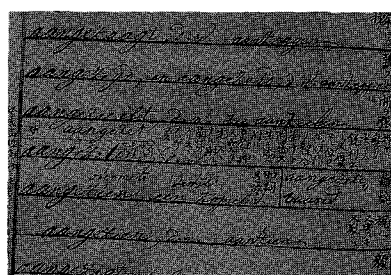
- ◆ この辞典が刊行された当時の我が国の蘭学はまだ未熟であり、オランダ語自体、ごく少数の人々が関心をもっていたにすぎなかった。長崎通詞の手になるオランダ語学の萌芽らしきものが見られたものの、みずからこのような辞典を編集刊行するには余りにも江戸の蘭学の力は未熟であった。したがって、この辞典はハルマの辞典を原本にしているとはいえ、その見出し語を利用して、それに一つまたはいくつかの訳語を配した、辞典というよりは単語集といった性格のものであった。しかし、『ゾーフハルマ』が長崎通詞による最も代表的な蘭学の成果とするならば、『ハルマ和解』は、たとえ中心人物の中に旧長崎通詞がいたとはいえ、江戸蘭学界における唯一といってもよい程の輝かしい作品と言えるだろう。しかも『ゾーフハルマ』より25年も早く成立刊行されているのである。

- ◆ 当館所蔵本は写本（全13冊）である。完成年を推定できる記述はない。刊本同様、半丁15行の印刷した罫紙を用いている。罫線はダークグリーンの色をもつ。左側にオランダ語が、右側に訳語が記されている。オランダ語の筆跡は美しい筆記体である。その筆跡から、訳語は数人の手で筆写されたことが推定される。なお、使用中に気がついたのか、あるいは原本と丹念に照合したのか、所々朱書きで綴りの誤り等が訂正されている。

<参考文献> 『江戸時代蘭語学の成立とその展開 Ⅲ』（849-2）当館所蔵本についての記述がある。



2 ハルマ和解



2 ハルマ和解